

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2008
課題番号：19720132
研究課題名（和文） 学術的な場における理工系学生の英語コミュニケーション意欲を高めるための実践的研究
研究課題名（英文） Developing Japanese science majors' willingness to communicate in academic contexts
研究代表者 クリストファー ウィーバー (Chris Weaver)
東洋大学・経営学部・講師
研究者番号：50345336

研究成果の概要：

英語の「コミュニケーション意欲」(WTC)に関するモデルを対人関係の観点から解釈し、説明するという新しい創造
コミュニケーションにおける対話者の重要性

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	800,000	0	800,000
20年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	180,000	1,580,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：コミュニケーション意欲、英語、理工系学生、コミュニケーション不安

1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクトは、日本人の理工系の学生が学術的な場で英語を使用する意欲を育むことに焦点をあてるものである。第一に、学生の「コミュニケーション意欲」(WTC)を定義づけ、それを学術的な文脈における実際の英語使用と関連付ける。第二に、ポスター・プレゼンテーションや模擬国際会議などの学術的な文脈のどのような特徴が、理工系の学生の WTC に影響を与えるのかを同定する。

第三に、課題を繰り返して行うことが、日本人学生の WTC のレベルを高める手段として有効かどうか評価する

2. 研究の目的

理工系学生が自分の「英語コミュニケーション意欲」として報告している内容と、英語の授業と模擬国際会議における彼らの実際の英語使用との関係について調査し、考察する

こと

2. 研究の方法

主として理工系大学院生を対象に国際的な学会発表などの場における英語コミュニケーション力の強化のための特別セミナー授業を開講しており、この科目の実施と平行し受講者から定量的データと定性的データを収集する。受講の初めに一連の短い「コミュニケーション意欲」(WTC)に関するアンケート調査(Weaver 2004)を実施し、模擬国際会議を含めたポスター・プレゼンテーションを4回行い、ビデオ並びにヴォイス・レコーダーで記録し、それに基づき学生たちはグループ・ワークによってより効果的なコミュニケーション方法について議論しあう。このペア・レビューとポスター・プレゼンテーションをDVD化して、指導の要点を盛り込んだワークシートを使って議論を深める。ワークシートは、コミュニケーションの状況におけるどのような要素が学生たちのWTCのレベルに影響を与えているのかを自ら同定していくための支援を行うためのものである。最後にインタビュー・セッションを設け、これまでの作業と議論のまとめ、補足を行う。

プロジェクトの二年目においては、初年度とは別の新しい受講者について、授業の進行にあわせて定量的データと定性的データを収集する点については初年度と同様の手順で行う。ただし、分析の焦点としては、理工系学生の「コミュニケーション意欲」(WTC)と学術的な文脈における実際の英語使用との関係を調査するという点ばかりではなく、理工系学生のWTCを発達させるために最も有効な方策を同定することにより多くの比重をかける。従って、初年度の学生グループと次年度の学生グループのパフォーマンスを

詳細に比較しながらの分析と洞察を通じて、教育的な提言を行うことがプロジェクトの中心となる。

3. 研究成果

の調査によって得られた情報は、予測していなかった発見を導き、また、英語の「コミュニケーション意欲」(WTC)に関するモデルを対人関係の観点から解釈し、説明するという新しい創造があった。この予測していなかった発見とは、理工系の女子学生の報告が、理工系の男子学生に比して、コミュニケーション不安のレベルが有意に高いことを示したことである。この調査結果は、女子学生の方が一般的には言語能力がより高いとする従来の考え方とは逆の結果を示している。この結果の説明として考えられることとして、ひとつには、本研究の対象は理工系学生であり、この分野は伝統的に男性優位の分野であることがあろう。

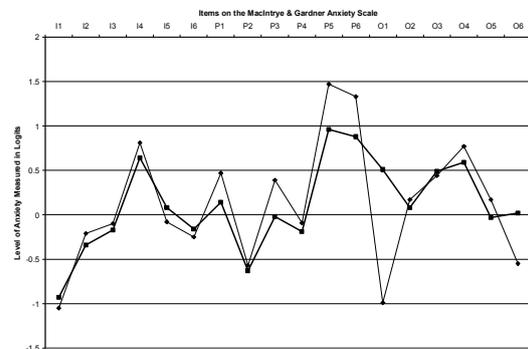


図1 男子学生と女子学生のコミュニケーション不安のレベル

本研究によってこれまでに浮かび上がってきた第二の重要な発見としては、コミュニケーションにおける対話者の重要性が挙げられる。被験者の学生は、英語でコミュニケーションを行うことに対する意欲は、自身の英語コミュニケーション能力として自分が考

えているレベルと対話者の英語コミュニケーション能力の差異によって変動すると報告した。学生はまた、他者と話し合うことの目的が何であるかということが、彼らの英語によるコミュニケーション意欲に影響すると報告した。これらの調査結果は、対話者が及ぼす効果が重要な要素をなしていることを示唆しており、この点は、これまでの WTC 研究において指摘されてこなかった点である。

また、英語の「コミュニケーション意欲」(WTC)に関するモデルを対人関係の観点から解釈し、説明するという新しい創造もあった。

学生たちの報告から彼らの英語の「コミュニケーション意欲」は3つの要因からなる。一つ目の要因は教育的な状況で彼らが思う彼らの英語能力。自信を大いに持っている学生は英語のコミュニケーション意欲も高い。2つ目の要因は話す対象となる人物。学生たちの報告によると自分より英語能力が高い相手に対してコミュニケーション意欲がある。なぜなら彼らはその相手と関わることにより英語を上達することができるからだ。結果として日本の学生のコミュニケーション意欲が高まるのは、英語の外国人講師や留学生、英語の授業中の日本人の英語講師である。

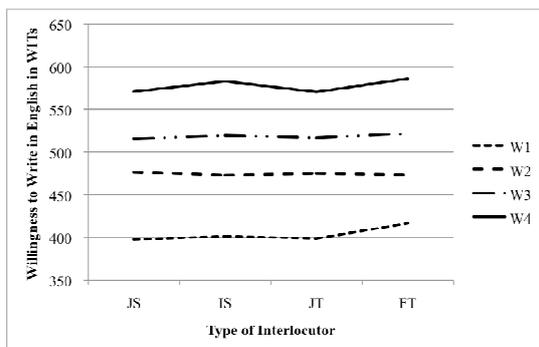


図2 学生の英語のライティングの意欲対象者

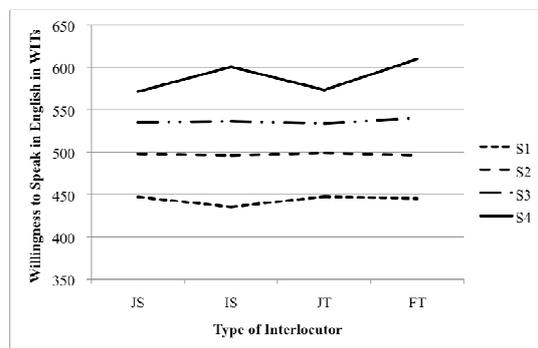


図3 学生のコミュニケーション意欲対象者

3つ目の要因は会話の状況の目的により学生のコミュニケーション意欲が左右される。例えば英語を練習することが目的であれば学生は何人もの人に英語を話し、書く。しかしながら彼らの英語力を上達することが目的となると、学生たちは英語が熟練した高いレベルを持っていると思われる人に対し英語を話したり書いたりしたいと報告された。

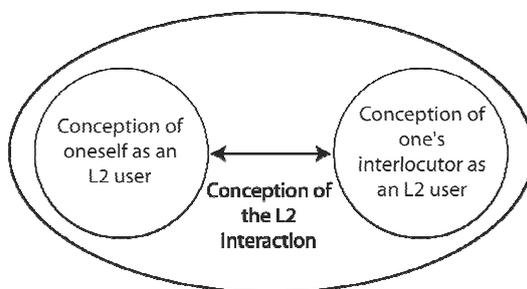


図4 会話の状況による学生のコミュニケーション意欲

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

Weaver, C., & Veenstra, J. (2008). The variability of foreign language anxiety over time. In K. Bradford-Watts (Ed.), JALT2007 conference proceedings. Tokyo: JALT, 272-282.

[学会発表] (計 4 件)

- ① “Interlocutor effect on willingness to communicate” Japan Association of Language Teachers (JALT) conference, Tokyo, Japan, November 2nd, 2008.
- ② “A FACETS analysis of Japanese EFL presentation skills” Pacific Rim Objective Measurement Symposium (PROMS), Tokyo, Japan, August 3rd, 2008.
- ③ “Pinpointing sources of variation in Japanese students’ willingness to use English inside an EFL classroom” Temple University Applied Linguistics Colloquium, Tokyo, Japan, February, 10th, 2008.
- ④ “The dynamic nature of language anxiety over time” Japan Association of Language Teachers (JALT) conference, Tokyo, Japan, November 23rd, 2007.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

クリストファー ウィーバー
(Chris Weaver)
東洋大学・経営学部・講師
研究者番号：50345336

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者